

修改家民古 物語

その2 〈完結編〉

— 未来への扉 —

Kazue Kota

庭家 甲田 和恵

完成した京町家の玄関



「KIMONO プロジェクト」
<https://rakukatsu.jp/kimono-project-introduction-20201201/>

● 辿るはずだった時間

“これはのぞんでいた未来”

“そして叶わなかった未来”

手と手を取り合う、着物をまとった万国の女性たち。

それぞれの国の象徴を宿し、心をこめて作られた着物。

ふるさとに包まれ誇らしげで、

彼女たちの穏やかな微笑みは互いへの慈しみに満ちていた。

生か死かの戦いを起源とするオリンピックを一瞬でも真の平和へと転換できたかもしれない。

と転換できたかもしれない。

と転換できたかもしれない。

と転換できたかもしれない。

と転換できたかもしれない。

それはこの時代には絵空事だったのだろうか。

2021年東京オリンピックで、このプロジェクトは実現しなかった。

私の胸の内、奥深くから叫びのように込み上げてくる「何か」は胸を痛く締め付け、遂に頬をつたった。

止まない涙だった。

2020年冬、京都。

解体の終わった古屋は失われた時、本来辿るはずだった時が再び刻まれるのを待ちわびていた。

しかし、そのためには私たち夫婦がその記憶と心を取り戻さねばならなかった。

「この国がいかなる国なのか」

「日本民族とはいかなる民族だったのか」

それは決して形骸的なものではなく、連綿と繋がれてきた「何か」である。

私たちは戦後第三世代。

自然、歴史、文化、食べ物、家、服、政治、経済、人との繋がり…。生活の全てにおいて、もはや経糸は切断され、緯糸である自身の持

つ本来の生命力、そして心までもが失われつつある。

ふと気がつくとなんと心許ない。

一

果てしない寂しさが響く。

何を手掛かりに再び思い出せるのだろうか。

眼前に佇む古屋の大黒柱、土壁、漂う空気、陰影、そして自分の中の遺伝子に刻まれて

いるであろう微かな感覚、そして懐かしさを辿るより他無かった。

作業は炭と鉱物を土に埋める作業から始まり、家の設計、工法、取り扱う材料、建築資材、配管、水道、照明設備と建具探し、全て自分たちの手と足で行なった。



建築前の陰影

一つの家を建てるのに考えることは沢山あった。

全ての計画も作業も0-1テストで導き出した。

私たちの心が目覚めるように。

二

●炭と鉱物を埋める

店員さんの怪しげな目線に夫はビクビクしていた。

私たちの0-1テストは完璧ではなかった。

講義も指導も受けたわけでもなく、気がつけばやっていった。

いや頼るものが他に無かっただけなのだ。

それで長い長い設定文をその都度唱えていた。

狭い鉱物店の中、他のお客さんもいて店員さんもいる中で何度も

何度も、唱えては0-1、唱えては0-1、を繰り返していた。

いよいよ空気が重くなってきた頃ようやく全てのテストが終わり、色々なものから解放された。

夕方のお店から、すっかり夜になっ

ていた。
ハーキマーダイヤモンド、月の石、隕石、水晶数種、シュンガイト、ラリマーなど原石は30種類以上、そして一二三糖、七五三塩、マハ



土に入れた石や塩



炭と鋳物

フアーラ、フランキンセス、溶岩石、備長炭、活性炭あちこちから仕入れた。

翌朝揃った材料を並べ、予め出しておいた位置と穴の大きさ、深さを元に二人の奮闘作業が始まった。

張り詰めた空気、初めての作業にも関わらず不思議と違和感は無かった。

はじめにどこの穴から、何を埋めるか、どのくらいの量を入れるのか、石の並べ方、埋め戻しの方法は…。

方位や地形など頭には入っていたが詳しいことはO-1に全てを委ねる。

作業が終わったのは3日後だった。

石と炭の代わりに60体近くの土のう袋がビッシリになった。

土間の整地、炭埋作業で出た土は合計10トン以上。

全て二人の手作業でトラックに積み込んだ。

足も腕もパンパンで節々も悲鳴をあげていたが無我夢中だった。

見えない土の中の作業。

誰も知らない自分たちの取り組み、天と地、そして自分たちだけが知っている。

納得のいくまで作り上げた土台、自分の中の何かが根を下ろし始めた。

三

●生命力のある木材

日本の風土に生まれた木、生命力のある木。

贅沢でも何でもない。

本来自然そのものである自分たちの体、いのちと真剣に向き合いたかった。

心も体も、見えないエネルギーも含めて、生き生きとする「場」を作りたかったのだ。

しかし、かつての当たり前は、今の希少。なかなか納得のいく材木が見つからなかった。

搜索は数日間続き、ようやくO-1テストも十と示す、代々続く一軒の材木屋さんにたどり着いた。

神域である照葉樹林の深い山と夫婦岩に近い古の海に挟まれた三重県伊勢市二見町松下。

力強い木の匂いに包まれながら、海風に私たちは吹かれた。

自然の風に晒され、太陽を浴び、丁寧に製材され、我が子を愛でるように、父母をいたわるかのように、静かな暗いところに木材は寝かせられていた。

尾鷲、田辺、木曾……産地はどこも水の清らかな水源地。

立ち木として生きていた時も力強い大自然に育まれ、大切に加工されたのだろう。

木材の表面が見たことのない虹色の光で語りかけてくる。

自分よりもはるかに年を重ねた木の重厚で清らかな匂いからは、深山のせせらぎ、鳥のさえずり、漂う靈感を私たちに伝える。

「生きている」

木の精を初めて眼にした。



三重の材木店

四

「なぜ、二十年ごとに建て替えんとならんのか、不経済じゃないのかとか言う人がおったんですわ。しかし木というのは二十年くらいになると、その木の精というのか、それが衰えてくるわけです。

建て替えると木が本来持つものも清新になりますわ。それで自然と頭が下がるんじゃないですか。

いや、自然そのものに打たれて頭を下げさせるような、精神性のあるものを作らないとあかんのです。」

昭和六十年に伊勢神宮のお茶室を建築した数奇屋大工・中村外二棟梁。

木曾ヒノキは自然林で長い長い時の中、大自然のエネルギーを吸い込み、ゆっくりりと成長し育つ。全ての木に精が宿るわけではない。森の中でも「母なる木」として他の生き物たちの命を支え、生きる叡智を授けてくれる木だ。

今、母なる木が日本にどれだけ残っているだろうか。

そして母なる木が育つ風土が残っているのだろうか。

自然が心を映す鏡のように思えた。

五

●竹小舞

竹の長さを揃えて切る。

差し込みを小刀で削る。

縦に差し並べ、上から縄でからげてゆく。

数力所、縦と横を縄で一つ一つ螺旋に螺旋にぐるぐるすると。

初めてなのに込み上げる懐かしさ、竹と縄と刀の単純な作業は、深く教わるでもなく、こうやるんだ！と言わんばかりに指先が勝手に動く。

結びの始まりと終わりの縄始末、結束の仕方、どんだん泉のようにやり方が湧いてくる。

ああ、この作業はしたことあるんだ。

生まれて初めての小舞づくりは私の記憶の種に水を与えたようだ。

一枚、また一枚と小舞の完成が早くなつてゆく。



小舞編み

「知ってるか？ 昔、小舞編みは子供の遊びだったのよ」
突然、植木屋の修行を始めたばかりの頃に出会った当時70代の棟梁を思い出した

「昔はサー、家づくりはみんなをやったのよ。」

あるもん全部使つてよ。
木、切り出してよー。

客も職人もそんな無かったよ。
年寄りも、ちっこい子供だって遊びで手伝ったくらいだから。

今はなんでも金で誰かに頼む。

もったいねーよな、自分でやる

方がいい家になるんだからよ。

なんでも自分たちでやったのに、

今の人、知恵も力もねーよ。」

六

20歳もいかない頃だった、学生

からすぐ庭修行に入った。

棟梁の言う通り何も出来なかつた。

地ゴテ、セツトウ、左官ゴテ、

シヨウセン、サンマタ、フネ、クワ、石ノミ、コヤスケ、テツペイ、ビシヤン、手ぼうき……。

剪定道具、土道具、石道具、左

官道具、据付道具、初めて手にする道具。

名前もすぐには覚えられなかつた。

しかし、ほとんど昔から形が変わらない道具と手で土に触れていること、自然に触れていることでいつも心は不思議な安心感で満たされていた。

みんなの小さな手と道具から空間が生み出され、生み出された庭はアンブとなり、木漏れ日や水音、木の枝葉の擦れ合う音、四季の移ろい、虫や動物たちの声を営みへと取り込んだ。

そして空、太陽、水、風、土、大自然へと、いのちの淵源へ意識を導くのだった。

あの時と似た感覚。

出来上がった小舞壁に囲まれた空間は不思議な空気を醸した。

私たちには新しい、けれど懐かしい空間。



階段作り

ゆっくりでいい、手探りでいいのだ。

この確かな懐かしさを辿りたい。その先にあるものを感じたい。

七

●発酵、土の蘇生

解体で出た古い壁土。

50袋以上、いやもつとあるぞ。

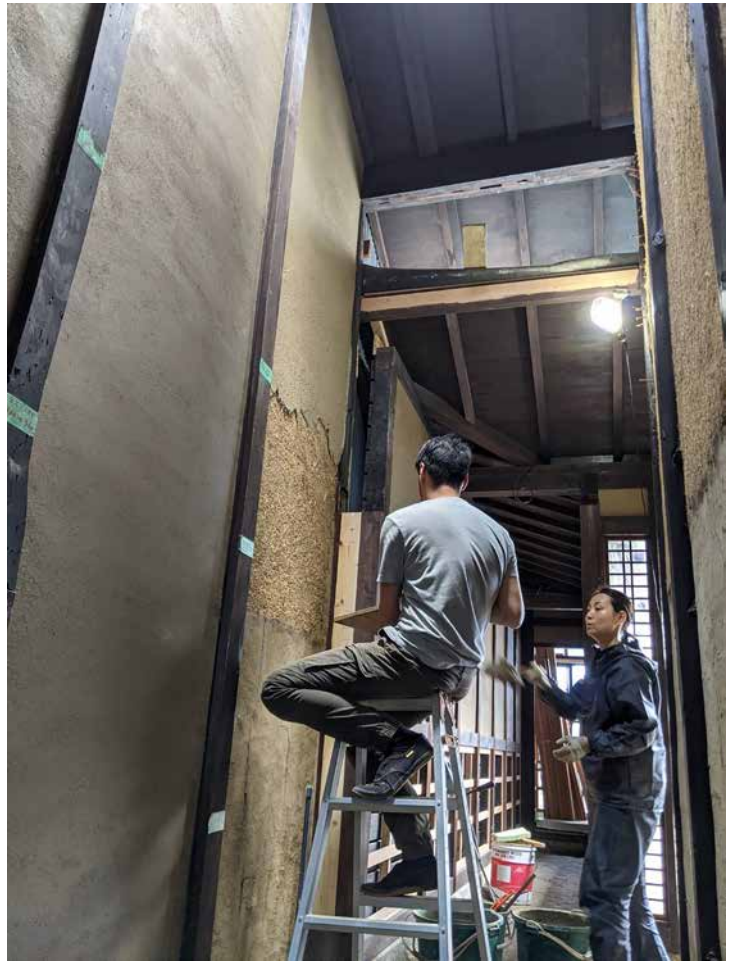
0-1はマイナスと出る。

試しに水を混ぜて練ってみるのだが粘りが全くでない。

新しい壁土の流通はほとんど無いし、そもそも庭に積み上げられたこの土囊の山。

これ、どーするねん……！

何とかして使えるようにならな



土壁左官

八

●心育む灯

とある古照明店の机。

手書きの照明のカタログが並べられていた。

明治、大正、昭和の時代のものらしい。

当時の人々が西洋の文化をどのように取り入れるかを考えに考え、畳、障子、純和の日本建築にも調和するように、たくさんさんの照明の形を生み出していた。

その時代の喜びは、どこかへ旅行するとかではなく、家の時間、家族との時間を大切にしていたのだと古照明店の店主は教えてくれた。

激動の時代ゆえだっただろう。

何気ない当たり前の日常が尊く、家族とのひと時が永遠に続いて欲しい。

そんな思いを抱いた人もいたかもしれない。

家族で集い囲む食卓。温かで、幸せな時間。

この照明たちはたくさんさんの人の物語を見てきたのだ。

時を経てもその灯の温かさは消えてはいなかった。

私たちに力くれるお日様の光も、私たちを見守るお月様の光も大好きだ。

それと同じくらいこの灯が尊く感じられた。

九

古照明のほか、和紙で作られた照明灯具のお店にも足を運んだ。

秋田杉の木材を湯曲げし生み出される曲線。

土の力を再び蘇らせる…。植木屋ならではの発想かもしれない、とんでもないことを思いついた。

祈る気持ちで手持ちの肥料を実験するとプラスが出た。

その肥料とはフミン酸、フルボ酸、スルホン酸といった有機酸の肥料で、そこに新しい薫^{むら}スサと粉備長炭、エリクサー水を足したのだ。

季節は春、雨の予報、練り上げた土を古屋の中にした。

数日後玄関を開けると強烈な匂いがする。

うーん、ニオイの元を辿るとそこには茶色からねずみ色に変わった粘土があった。

糸引く粘り！これはいけるー！

匂いとは裏腹に胸が踊る。

「ぬれたでー！」

主人の歓喜の声が家中に響き、古い土壁が新しい世代へと塗り替えられた。



大正時期の灯具

手作りの和紙で作られる照明は簡素でありながら、自然との付き合いを重んじながら、この自然が生み出したもので、日常を心豊かに過ごして欲しい作り手の、細やかな心遣いが滲み出ていた。

私たちの家改修の経緯をお伝えすると、何か深いところで感じ入ってくださったようで、照明灯具への想いと、社会の変化による価値観の変化、日常の変化を切実にお話しくださった。

営みから外れた伝統、その内にある心が途絶えてしまう。

正に今その時を迎えている気がした。

経営を考えれば、陳列する物が変わる。

しかし、変わらずに和紙と木の照明を産み出すのは風土との繋がり、代々受け継がれてきた心を、絶やさぬように…。

そのような想いが私たちの琴線に触れ、挫けそうだった私たちに再び力を与えた。



手作りの和紙照明（写真上）と完成した京町家（写真下）

その後も0-1テストにより心ある職人さんたちのご縁を賜り、それぞれに教えられ、感動しながら、2021年8月ようやく家は完成した。

● 結、産

十

「なんでも心を込めて向き合うのよ」

数年前、宮下洋子さんに言われた、一言。

この一言を大切に私たちは歩んでいた。

有名になりたいとか、大金が欲しいとか、こう思われないとか、贅沢したいとか、そんな事はどうでもよかった。

家づくりでは心共鳴する生産者の方、職人さんたち、そして私たちを目覚めさせる自然と出会った。

それはこの時代において希望であり、私たちを支えてくれていた。

それぞれの小さな手は、“日本民族の心を思い出したい”この想いに集結した。

たくさんの心の手の“結”により一つの大きな心が形を成し、産まれたのだ。

私たち二人では決して成し得ない。

そして私が修行時代に感じた感覚と同じく、みなで作った空間は、母なる天地大自然へと意識を繋げてくれた。

産霊（むすひ）という言葉

それは自然と伴い歩んできた、我々自身の内にある“心”の力ではないかと直感した。



木曾ヒノキの神棚

十一

● 私たちの“これから”

2月中旬、福井県の敦賀港から北海道小樽港にフェリーで海を渡った。

船の窓から覗くと遙かな天と永遠に続きそうな海が結ばれ、昇ってくる太陽は始まりの兆しのように思えた。

あの時、込み上げてきた涙は私の中にある先人たちの心だったかもしれない。

“大和は國のまほろばたななすく”

青垣山ごもれる倭し美わし”

自然と伴い、それぞれのいのちの輝きを自身の喜びとして感じていたのだろうか。

いつか本当に真の心で手と手を取り合える日が必ずくるだろう。

本来辿るはずだった時が動き出すのだから。

古屋改修で歩んだ道、その道で私たちが感じたこと。

辿ってきた道の先にこの北海道がある。

“確かなもの”が私達二人を突き動かしていた。

京都の家は私達を錬磨し、目覚めさせる入り口だったのだ。

住まう人の心が豊かになるよう、心ある職人たちの手で産み出された。

こんなに早く手放す事を決意するのは私達ですら思いもよらなかった。

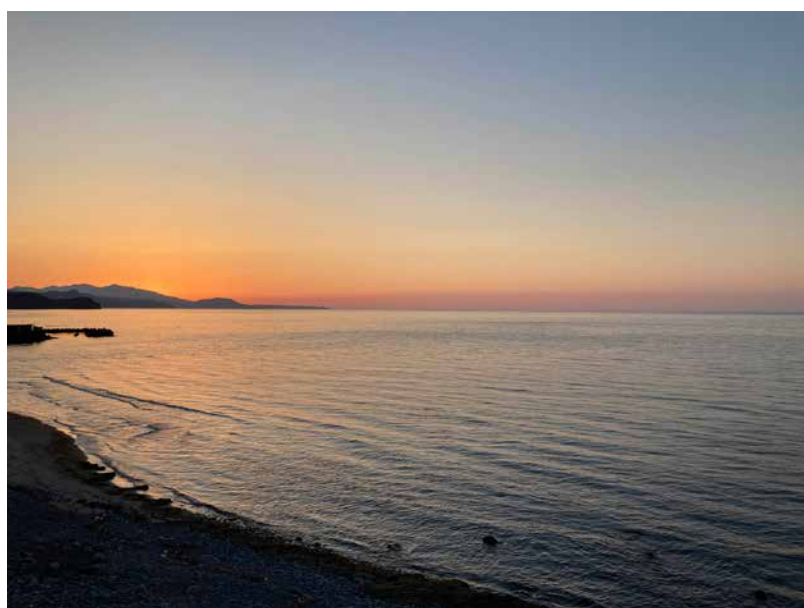
しかし、それを決意させる程のプロジェクトが北海道で始まる。

大切にしてください（募集中です）

変革の時、これから如何になるか、正に“間”。

真と偽の混じる世に、生きる“導”は自身の内にある。

連綿と繋がってきた“記憶”そして“心”が必ず導いてくれるだろう。



小樽から仁木へ向かう道の海

大きな手放しは、大きな気づきと新たな扉を開いた。

再び有から無へ、私たちは“0”になった。

心一つにする仲間たちが待っている。

“懐しき未来”
ここから始まるのだ！

完